



TITLE:

東亞地域の概観(二)

AUTHOR(S):

小川, [琢]治

CITATION:

小川, [琢]治. 東亞地域の概観(二). 地球 1929, 12(3): 163-174

ISSUE DATE:

1929-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/183658>

RIGHT:

東亞地域の概観 (二)

小川 琢 治

六、東亞と東亞及びその海岸

東亞文化地域を考察せんとするには漠然と中央亞細亞(中亞)と呼ばれる地域との關係を明にするを要する。然るに之を區別し得る様な山嶽河流の如き地理的に明確なる境界線が認められない。故にリヒトホーフュンの鹹湖の在る內陸流域を中亞としてその周邊の海洋に注流する河川の在る邊緣地帯と區別したのは妥當なる見解である。

前者は主として水蒸氣に乏しい大氣の風化が行はれ、風力による外は堆積物の移動は少く、之に反して後者は流水の浸蝕作用が行はれる處である。その結果として地貌上に顯著なる對照を生じ、前者に在つては現在の氣候狀態となる以前に現存した溪谷の間に風化した物質が埋却して緩慢なる波狀の凹地が出来るのみで著しい谿谷の發達のしやうがなく、後者に在つては流水の浸蝕作用により谿谷が次第に深くなり山嶽間に急峻なる勾配が出來つゝある。クロボトキン公が亞洲の地勢を北米洲に比較して之と對稱的位置を占めた高地帯があるとし、リ氏の邊緣地帯なるものをアルプス式谿谷風景の分布する處として之と區別したのも亦た大體に於いて同じ事實を言葉をかへて語つたものである。

之を約言すれば中亞といふのは主として地文的に明瞭なる概念である。

然れども内陸流域を盡く中亞と呼べばペルシア、アラビアの如く海に接した西亞までも含まれ得べく、中央といふ語の根本意義に撞着するを免れぬ。故に此の兩高原を除外して、主として北緯三十五度以北のカスピ海から興安嶺西に亙る内陸流域地帯を中亞と看做すべきである。

此の中央に存る位置と地文状態とを考慮する定義に従へば中亞はカスピ、アラル、パルカシュの三鹹湖の窪地を抱く低い西部と蒙古西藏を含む高い東部との二つとなり、此の東半は當然我々の茲に考察する東亞文化地域に屬する。

主要河流により此の地域の範圍を示せば、北界は黒龍江、南界は西江及び紅河にして、その中間に黃河及び揚子江があつて、冷溫帶、溫帶、亞熱帶及び熱帶の三つの緯度の高さによる氣候上の區別がある。

此の地域の範圍を考察するに當り既に述べた陸上の限界と並べて、海岸線によつて示された輪廓も亦た我々の注意を喚起する。その一般の方向は黒龍江から起つて紅河々口まで西南に走り、其間に朝鮮半島の突出と渤海灣の深く入り込む外は、東南に向ひ弓狀を描き、是より南に更に印度支那の半島が南に向ひ突出して、その縊れた先きが馬來半島を成して赤道直下まで延長し、デッカンの大半島との中間を遮斷してゐるのである。此の滿洲東南岸と朝鮮半島との屈曲を更に大きくした臺灣の對岸以南の支那東岸と印度支那半島はオスカル・ペッセルの所謂類型的肢節 Homologous members の最も顯著なるものである。然れども兩者の差異が單に相互の緯度の關係に於いて異り又た

規模大小に於いて異なるのみでなく、印度といふ獨立の文化地域との間に横はる大なる障壁となつてゐることが更に重要なのである。佛家古代の世界といふ觀念は大唐西域記にいふ所の四洲に表現されてゐるが、その東の毗提訶洲と南の瞻部洲との區劃は主として此の障壁に在るもの、如く見える。此の屈曲した海岸線に沿ひその海上に之と或は離れ、或は近寄つて竝走する島弧の存在することが又た東亞地域の地理上の一特色として數へられる。是は太平洋の西岸に限り見られる所の海岸の特性にして、中米及び地中海北岸の島嶼も之に類するも、兩者共に東西に延長し、殊に中米の島弧は全く熱帶に限られて北半の大陸の側は狹長なる地頸を成し、地中海のそれは兩大陸に跨るアレウと島弧に類似するもので、廣大なる大陸の縁を取つた形態とは頗る趣が異つてゐる譯である。

七、地域の中心と周邊との關係

陸上及び海上の限界によつて生ずる地域の内、地方的關係を觀るに、之を決定する主要なる地理的要件は位置即ち交通の中心とその周邊に於ける距離とである。此の要件は陸内の主要交通線、水路及び海上の交通の便で、滿蒙を含む全地域に於いて此の要件を具備する場所は渤海灣の西岸で、天津を前港とした北平（北京）を措いて外にはない。是れ北平が元明清三代七百年間の首府となつた理由である。然れども此の位置は黃河及び揚子江の水路に對しては北に偏し、經濟上からいへば鎮江又は上海を前港とした南京の方が優越なるは勿論で、北京を輿座敷に喩ふるならば南京が表座敷に當るのである。元以前では黃河の流域が古代から文化地域として重要であつた爲めに長安洛陽開

封(汴京)が首府となり、北京と南京との中間に於いて交通の要點として此の邊に久しく移動しつゝあつた。

北京又は開封を奥座敷とすれば渤海灣を抱く遼東山東兩半島は之を蔽護する藩屏を成し、直隸水道は奥の木戸口に當る。又た表座敷の南京に對する鎮江上海寧波等はその表玄關たる位置を占めるものである。北京に對する朝鮮半島も又た長い廊下の端に在る一の玄關に相違なく、臺灣から樺太に至る我が群島の諸大島は此の大厦屋に對して東南に向つた離れ座敷の關係を有するに過ぎなかつたのが、最近五十年間に太平洋の海上に世界交通の幹線が開けると共に一躍して東亞の玄關となり、應接間となる位置を占むることゝなつたのである。

之を約言すれば西洋の物質的文明の最初の成功は風波を乗り切り得る汽船航海の實現であつて、安全迅速なる交通の途が是により開け、而して東亞の最外邊に在つた我が群島が海岸線の屈曲の少い支那よりも遙かに全世界に對して都會の好く、東亞地域に於いて最も重要な位置を贏ち得たのである。

然れども港灣は奥地と連絡して初めて機能を發揮し得るものであるから、大陸内部の交通が開けることが我が群島に取つても必要である。汽船に續いて發明された鐵道の網目が密になるに従つて陸内交通の能率が増進するのであるが、東亞大陸の現状を觀るに、外國の資本と技術と管理とによつて興つた鐵道營業が支那人に回收された後には機能が麻痺して仕舞ふ傾向を示し、延長工事も亦た遅々として振はない。現今の如き近視眼的政策に熱中する民國爲政者の頭腦が一變せねば、我が

國の六十年に進み來つたと同じ常軌を大陸側の地方が進み得るには前途ただ遠きを感じざるを得ない。

八、地文的地域の區別

以上述べ來つた所は掃盪的概括に止り、箇々の地理的要素に就いて更に細觀せねば真相を了解し得られぬ。地文的地域を區別して此等の要素の如何に組合つて成立つかを知ることが第一に必要ならんと想はれるから、先づ之を一言する。

地文的地域なるものは地勢地質地形氣候と植物分布により生ずる地方的特色の範圍を意味し、之に占居する住民の生活狀態が加はつて地理的風景が出來るのである。前に述べた中亞といふ觀念はその一例で、主として氣候の支配によつて起つた地形及び生物分布がその根柢を成してゐる。然れども地勢地質を考慮すれば中亞と東亞邊緣地帶として總括した地域の内に更に局部的地區の細別が起り漠然と中亞と總稱する地域は西藏セリンディア(新疆)外蒙古の三大地區に區分され、邊緣地帶も亦た南中北支那内蒙古朝鮮半島等の大小の地區に區分され、島嶼地帶は我が群島の場合で圍繞する海岸線により明瞭なる輪廓を有する箇々の島嶼を成してゐる。

他の地文的要素を考慮に入れる時は此等の各地區の間、中亞地域と邊緣地帶との間及び邊緣地帶と島嶼地帶との間にそれ／＼漸遷の傾向あるもので、就中朝鮮半島の如きはその第三の場合に該當するものである。故に箇々の地區は必しも動す可らざる界線により之を限り難く、人文的要素に就

いて考察すれば地文的關係の漸遷することが頗る意味の深長なるを覺へる。朝鮮半島が單に地勢上の陸橋なるに止らずして、文化傳播の通路としての機能が認められるのはその好例である。而して此の陸橋を構成する地盤そのものゝ變遷を細觀すれば、此處に出來た海陸交通線の性質や之と結び付いて起つた國家及び都邑の興亡の歴史が明になる。

然るに此の區分の基礎とする所は地質構造によつて生ずる地勢即ち山嶽平地等の排列の大勢に在り、又た此等の凹凸は過去地質時代に經過した造山造陸兩作用の輪廻によつて變化した土地の最後の形相に在る譯で、土地の變遷 *Verdngang* を明にするに非ざれば地文區の成立を理解し、正當なる界線による區劃を描示することが出來ない。

地文的地域は多くの場合には民族及び文化の分布を限定するものではあるが、民族の分布は平地を中心とするから、その限界は必しも地文的地區のそれと一致せぬのであり、又た山地は平地に氾濫した異民族の勢力の十分に波及せぬ結果として、原住民族の殘生を可能ならしめることもあり、此の如き焼け杭から新らしい火焰を擧げる可能性も絶無でない。故に人文的地區といふものは地文的地區の如く明確なる範圍を限り難いのも已むを得ない。

或る地文的地區に對して山嶽は樁の如き役割を演ずる。此の樁により氣流の内外の流通が妨げられるから、氣候の局部的特色が出來て動植物の生活に影響し、延いて住民の生業の性質を決定し、民族獨特の氣風までも決定されることになるのである。従つて樁の間隙となる溪谷又は凹地の在否は隣接地區との地文的并に人文的差別に對して重大なる影響がある。

我が群島内の狭小なる地區に就いてその一例を求むれば、近畿地方の琵琶湖盆地と伊勢灣凹地とは何れも南北に延びて、鈴鹿山脈の地壘が兩者の中間に横り、前者は敦賀小濱の間に數多の斷層による溪谷が發達して冬季日本海から來る氣流が湖盆に流れ込むが、後者は北方に濃越に蟠踞する美濃山地により北方から來る氣流の大部分は遮斷されてゐるに關らず、伊吹山塊と鈴鹿山脈の間にある不破山門の地溝狀の凹處がある爲めに、前者に流れ込んだ氣流の一部が後者の北部に侵入するのである。此の影響は伊勢海凹地の北部を占むる美濃平野の冬半年の氣候を日本海岸の地方に類似する狀態に導くものゝ如く、現に農家宅地に環らす樹木が美濃及び尾張の北部では主として杉であつて越中の莊宅式孤立農家に類似してゐる。東海道を東から來る旅客の大井川天龍川等の農家を環る立木により生ずる村落の形相と著しく異つた此の地方の特有の形相は岐阜名古屋津三淵候所の氣候要素の數字を比較するればこの聚落の特相の由來を看破することが出来る。

都倫諾爾(喇嘛廟)の附近では蒙古高原の東界を成す興安嶺は西から觀れば殆んど著しい山嶽とも見えぬに關らず、東方から此の分水路に近づけば、奇峰峭嶺を仰ぎ、幽谷絶壑を縫ひつゝ登り、登り詰めて忽ち沙漠たる沙漠風景の展開に驚くのである。加之ならず嶺東の或る溪谷には西風に煽られた沙が嶺の低處を越えて流下し來り氷河の比較すべき沙河が尾根を被覆して溪間に流れ落ちてゐるのも一奇觀である。

生物及び人類の生活に在つても亦た東西兩斜面の對照は頗る截然たるものがある。今も圍場の名で呼ばれる東麓は嘗て森林繁茂し、滿洲旗人の占有する土地は支那内地からの移住者の火耕により

開拓せられ、秋冬の交に高粱畑に續いた丘足の緩斜面に野火の烟をあげつゝあるに對し、嶺西では蒙古包が疎な草原の果てに僅かに指點され、小屋を造る山西邊の移民等の生業も亦た多くは牛羊の放牧に在る。即ち北緯四十五度附近の興安嶺分水界は游牧と農耕との判然たる界線となつてゐるのである。

此の如き細形は姑く措き我々は此等の箇々の枠となつた凹凸の大形を成した地盤に就いて看一看せねばならぬ。

九、中 亞 高 地

中亞の東部は本誌第七卷に述べた如く、バミール高原から喜馬拉耶山脈興安嶺等の弧狀の高地が連亘して一大楕圓弧を描き、西はタシュケント、東はシルカ、アルグ兩河の合流點（ボクロフスカ）の兩點を結んだ四千二百浬の長さを有する一直線が略ぼ之を斜截する直徑を成し、此の内に含まれた地域は一般にその周邊より高く、就中北緯三十七度の緯線の南は四千米を越えた高地を成し、タリム河流域の凹地、黑龍江黃河黑イルチシュの豁谷等に千米以下に降つてゐるのみで、此の一般の地勢が知れ始めた頃にカール・リッテル等の『高い亞細亞』Hochasienと呼んだのは妥當であつた。

然るに高原狀に崛起した此の六百萬方浬の面積を含む地域は局部の凹凸に頗る變化がある如く、地質構造上から觀るも亦た決して單純なる岩層から成り立つものでない。南の邊緣に最も高峻なる山脈を成す喜馬拉耶と後喜馬拉耶 Transhimatalaya はアルプスと同時代の褶曲系に屬し、中生代から

第三紀の間に海底（テティス海）に堆積した岩層の褶曲崛起したものであるのは最も著しい事實である。之に反して蒙古では之と同じ時期は陸内の廣大なる湖水を成した地域に堆積した岩層が餘り大なる變動を受けないで平坦なるゴビ沙漠（瀚海）の高原を成し、兩者の岩層の性質も含まれた化石の種類も受けた變動も互に此の上もない對照を呈するのである。我々の大小の弧狀構造線に就いて考察した結果からいへば、東亞高地の成立はアルプス式褶曲の如き水平に働く側壓力の作用によつて生じ得べきものではなくて、側壓力となる原動力は地殼の深い下層に於ける岩漿の移動に在るべく、此の移動が又た廣大なる地域を構成する大なる地塊全體の隆起運動ともなるとして説明されるべきと信ぜられる。

此の大地域の隆起は濠洲と同じ大さの階級を有する陸塊の昇降運動で、若し大洋の水準面が一樣に二三千米高まつたとすれば、スマトラからフィリピンに至る大島嶼群に類似したものとなり、地質構造上兩者の異なる點は熱帶海中に大部分の沈没した陸塊に比してその邊緣に沿ふた火山作用の著しからぬことが注意されるのみである。

此の隆起した陸塊の對部 Counter-part と看做すべきものはウラル山脈とオレクマ河谷により示さるゝ沈降した一大地塊にして、印度支那半島を南流するサルウェン河とカラ海に北注するエニセイ河との兩溪谷を連ねた直線は兩對部を横截する橢圓の一直徑となり、その東半は蒙古高原と東シベリアの臺地を成し、西半は南の巨大高峻なる高原に對して廣漠たる西シベリア低平地を成し、此の東西地勢の對照も亦た頗る顯著にして、四分された大陸塊の西側の一對の方が昇降の程度が東側の

一對よりも大きいことになつてゐる。此の排置は西シベリアの沈降地域の下層から密度の小なる多量の岩漿が南に移動したと假定すれば容易に解釋される。永い地質時代の間に分化した岩漿が南に向ひ移動する趨勢があつたとすれば、その結果は此の異常なる地勢の高低を成し得ると考へられる。シベリア及び中亞の地質構造は近年次第に明かになりつゝあるが、何れの山嶽も斷層により大小の地塊を成すことがその成績の中で最も我々の注意を惹くものであつて、局部的地勢に現はれた地塊の昇降が同じく下層に於ける物質の移動により最もよく説明される。

前に我々の使用した梓といふ語は此の如き地塊の多少或る方向に延びて地塊山嶽 Block-mountains を成すものを意味し、その規模の大小の差等は區々なるも、現在の高地の邊緣及び内部の凹凸には斷層による箇々の地塊の落差を異にする爲めに生じた地形である。

邊緣に於ける地勢上の特色は弧狀を成す山嶽の連互である。東シベリアの東南邊に古く認められたスタノブイ、ヤブロノイ兩山脈に連接した興安嶺及び大行山脈はその最も明瞭なるものである。大行山脈に關してはリヒトホーフエンの觀察に基いた壇狀坳裂 Saftelbruch 説が出つ、その地貌の性質が明かとなつた。リ氏は此の北に緩斜した地塊の東側が壁立した斷層崖の形を成し、その東邊に落ち込んだ直隸低地を隔て、遼東山東兩半島の第二の地塊の列がある事實と結び付けて、階段斷層を大仕掛けにした地塊の變動と考へたのである。而してリ氏はその輪廓の弧狀なることを説明する爲めに落ちる時に張力が外邊に向ひ働き、曳き裂く力が行はれるとして、曳裂弧 Zerrungsbogen なるものゝ成生を主張したことは嘗て述べた通りである。

エツアルド・ジウスの『地球の面相』第三卷を集成したのと、リヒトホーフエンの『東亞地貌研究』第一篇を公にしたのは略ぼ同時で、前者の校正中に後者が發表されたのであつた。ジウスは露支交界地の構造はオプルーチエフ等の露國の材料を採り、北支那の構造はリヒトホーフエンの『支那』第二卷所載の材料を採り、此等の地方の山嶽が主として斷層により生じた凹凸である事實を承認してゐるが、その褶曲により山嶽の崛起する根本觀念と全然撞着しない範圍に於いて此等の現場の觀察を尊重するに止り、婉曲に論歩を進めて東部アルタイ褶曲系を概括して、晩期の褶曲運動は歐亞山嶽の外邊に於いて感ずるのみであるといひ、イルクツス圓戯場の内部ではカムブリア紀の大高原が安靜の觀を呈し、その邊緣の褶曲はアンガラ植物群の時期まで續いたか又は此の時に再び蘇つたのみとし、之に反して邊緣地帶では太平洋の海淵に向ひ進むに従ひ一般的運動の徵候が増し、カムチャツカでも馬來半島でもコルヂエラは大洋に没する趨勢を示し、小笠原島すらも火山の排列が同様の現象により決定されてゐることを認めるといつた。

ジウスの眞意を忖度すれば、箇々山嶽内部の構造は頗る區々に解釋されても、その南及び東に向つて弧狀を成す傾向から推して、イルクツク圓戯場の邊緣を繞ぐる『古シベリアの頂顛』Schetel (verex, faite) から波及する側壓力が所謂アルタイ褶曲系の生長の原動力であることを暗示せんとしたのである。

最近『シベリアの地質』をゼルゲル氏監修の(地質學及び古生物學の進歩)第十五輯一九二六年)に寄稿したオプルーチエフ氏はジウスの大著作に露國の材料を提供した第一人であるから、この地

方の構造に關しては大體ジウスの見解に従つたのも當然である。

曩に本誌上に紹介したエミル・アルガン氏の所説は氏の輯製に係る亞細亞構造圖の色刷一葉最近に出版されたので、ア氏の懷抱する考説が餘程分り易くなつた。ア氏はジウスの第三卷第二篇の完成後に集つた材料を輯製してその考説の改造を試みんとして、ジウスの一方から加はる褶曲の波動とその前面陸塊とを考へる代り、背面の陸塊をも考へ、且つ此の如き地向斜帶兩側に在る多少の埤性(可塑性)を有する陸塊も亦た側壓力により褶曲し得ると考へ、之を底褶曲と呼び、此の如き二つ陸塊の間に壓縮されて地向斜に新らしい褶曲が生ずるとした。而してその原動力はエゲネル氏の陸塊移動説に従はんとするもので、ジウスの弧狀山脈の中側に壓力の起源を求むるに對して、巨大なる陸塊が水平の移動性を有すると考へてゐる様である。

此の考説は地殻の下層が埤性を有することを前定する可動説 *Mobilism* に立脚するから、従つて表層に見る所の地塊の隆起と沈降とはジウスの如く水平分力に對する垂直分力と看做す必要なく、割然と別種の運動とする必要もない。是は學説の進歩であると言ひ得る。然れど我々の假定は是よりも一層簡單で、深さを異にする地殻の下層に惑星としての地球の收縮に原因する割裂が起り、その結果が表面に大小の弧線を成した變動地帯を生ずるとし、陸上と海底とを論せず凹凸が起るとするものである。故に箇々の枠となる山塊の成因も亦た大地塊その物の成因と同じ第一原動力を假想して説明し得る。